

麻しん・風しん混合ワクチン予防接種を受けられる人へ

(麻しん・風しん予防接種説明書)

定期予防接種は、音更町に住民票がある人が対象です。

長期間の里帰りや、疾病などで町の指定医療機関以外で接種する必要がある場合は、事前に保健センターにお問い合わせください。

1 麻しん・風しんの症状について

○ 麻しん

麻しん（はしか）は、麻しんウイルスの空気感染・飛沫感染・接触感染によって発症します。ウイルスに感染後、無症状の時期（潜伏期間）が約10～12日続きます。その後症状が出始めますが、主な症状は、発熱、せき、鼻汁、めやに、赤い発しんです。症状が出はじめてから3～4日は38℃前後の熱とせきと鼻汁、めやにが続き、一時熱が下がりかけたかと思うと、また39～40℃の高熱となり、首すじや顔などから赤い発しんが出はじめ、その後発しんは全身に広がります。高熱は3～4日で解熱し、次第に発しんも消失しますが、しばらく色素沈着が残ります。

合併症を引き起こすことが30%程度あり、主な合併症には、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎などがあります。発生する割合は麻しん患者100人中、中耳炎は約7～9人、肺炎は約6人です。脳炎は約1,000人に1人の割合で発生がみられます。

また、麻しんにかかると数年から10数年経過した後に亜急性硬化性全脳炎（SSPE）という重い脳炎を発症することがあります。これは、麻しんにかかった者のうち約10万人に1人の割合でみられます。

○ 風しん

風しんは、風しんウイルスの飛沫感染によって発症します。ウイルスに感染してもすぐには症状が出ず、約14～21日の潜伏期間がみられます。その後、麻しんより淡い色の発しん、発熱、首のうしろのリンパ節が腫れるなどが主な症状として現れます。また、そのほかに、せき、鼻汁、目が赤くなる（眼結膜の充血）などの症状がみられることがあります。子どもの場合、発しんも熱も3日程度で治ることが多いので「三日ばしか」と呼ばれることがあります。合併症として関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。血小板減少性紫斑病は風しん患者約3,000人に1人、脳炎は風しん患者約6,000人に1人ほどの割合で合併します。大人になってからかかると子どもの時より重症化する傾向が見られます。

妊婦が妊娠早期に風しんにかかると、先天性風しん症候群と呼ばれる病気により、心臓病、白内障、聴力障害などの障害を持った赤ちゃんが生まれる可能性があります。

2 接種対象年齢

第1期：生後12か月から24か月に至るまでの間

第2期：5歳以上7歳未満で小学校就学前の1年間（年長児）

3 予防接種の効果と副反応について

予防接種を受けたお子様のうち、95%以上が免疫を獲得することができます。体内に免疫ができると、麻しんや風しんにかかることを防ぐことができます。

ただし、予防接種により、軽い副反応がみられることがあります。また、極めて稀ですが、重い副反応がおこることがあります。予防接種後にみられる反応としては、次のとおりです。

麻しん風しん混合ワクチンの主な副反応

主な副反応は、発熱（接種した人のうち20%程度）や、発しん（接種した人のうち10%程度）です。これらの症状は、接種後5～14日の間に多くみられます。接種直後から翌日に過敏症状と考えられる発熱、発しん、掻痒（かゆみ）などがみられることがあります。これらの症状は通常1～3日でおさまります。ときに接種部位の発赤、腫れ、硬結（しこり）リンパ節の腫れ等がみられることがありますが、いずれも一過性で通常数日中に消失します。

稀に生じる重い副反応としては、アナフィラキシー様症状（ショック症状、じんましん、呼吸困難など）、急性血小板減少性紫斑病（紫斑、鼻出血、口腔粘膜の出血等）、脳炎及びけいれん等が報告されています。

4 予防接種による健康被害救済制度について

定期の予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障が出るような障害を残す等の健康被害が生じた場合には、予防接種法に基づく補償を受けることができます。健康被害の程度等に応じて、医療費、医療手当、障害児養育年金、死亡一時金、葬祭料の区分があり、法律で定められた金額で支給されます。死亡一時金、葬祭料以外については、治療が終了するまたは障害が治癒する期間まで支給されます。

ただし、その健康被害が予防接種によって引き起こされたものか、別の要因(予防接種をする前あるいは後に紛れ込んだ感染症あるいは別の原因等)によるものなのかの因果関係を、予防接種・感染症医療・法律等、各分野の専門家からなる国の審査会にて審議し、予防接種によるものと認定された場合に補償を受けることができます。

※給付申請の必要性が生じた場合には、診察した医師、保健センターへご相談ください。

5 予防接種を受けることができない人

- (1) 明らかに発熱(通常37.5℃以上をいいます)のある人
- (2) 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな人
- (3) 予防接種に含まれる成分でアナフィラキシーを起こしたりしたことのある人
- (4) 予防接種を受けようとする病気に既にかかったことがある人、又は、現在かかっている人
- (5) その他、医師が不相当と判断した場合

6 予防接種を受けるに際しお医者さんとよく相談しなくてはならない人

- (1) 心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患及び発育障害等の基礎疾患を有することが明らかな人
- (2) かぜなどのひきはじめと思われる人
- (3) 前に予防接種を受けた時、2日以内に発熱、発疹、じんましんなどアレルギーをおもわず異常が見られた人
- (4) 薬の投与を受けて皮膚に発疹がでたり、身体に異常をきたしたことがある人
- (5) 今までにけいれんをおこしたことがある人
けいれんの起こった年齢、その時に熱があったかなかったか、その後起こっているか、必ずかかりつけの先生と事前によく相談しましょう。原因がはっきりしている場合には、一定期間たてば接種できます。
- (6) 過去に中耳炎や肺炎などによくかかり、免疫状態を検査して異常を指摘されたことがある人
- (7) ワクチンには抗原のほか、緩衝剤、安定剤、抗菌剤、着色剤等がはいっていますので、これらにアレルギーがあるとされたことがある人
- (8) 家族・遊び友達、クラスメートの間で、はしか、風しん、おたふくかぜ、水ぼうそうなどの病気が流行している時で、予防接種をうける本人がその病気にかかっていない人

7 予防接種を受けた後の注意事項

- (1) 接種当日はいつものとおりの生活をして激しい運動は避けましょう。入浴は差し支えありません。
- (2) 他の注射生ワクチンを受ける場合、4週間以上あけましょう。
- (3) 接種後2～3週間は副反応がでることがありますので、注意しましょう。
- (4) 副反応について(症状は「3 予防接種の効果と副反応」をご覧ください。)
 - ア 接種部位が赤く腫れたり、痛んだり、痒くなることがありますが、2～3日で消失します。接種部位はかかないようにしましょう。
 - イ 接種部位のひどい腫れ、高熱、ひきつけ等の症状がありましたら、病院を受診して保健センターに連絡してください。

不明なことがありましたら、保健センターにお問い合わせください。(電話0155-42-2712)